三、高松の部

旧高松村

一、高　六百二十九石一斗八升四合、百十三石五升二合

二、戸数　百二十六軒、内五十一軒高松村、二十九軒駒板、十軒倉縣、三十八軒安野

三、境界　東安俵村、西猿ケ石限、南は成島村、北幸田村、矢沢村（御郡内郷村志）

四、地名の由来　俗間に相伝ふ往古此の村の山上に一株の老松天を凌ぐ故に土俗高松と名付く（和稗郷村志）

高松と石の鳥居及び旧高松寺旧観音堂

一、俗間に相伝ふ往古この村の山上に一株の老松天を凌ぐ故に土俗高松と名付く。其の松精霊ありて祈願応せずといふことなし。故に遠近の諸民の参拝をなし歳時必ず之を祭る。終に天聴に達し石の鳥居を立てらる。其の後いかなる子細にや帝室に祟りをなすと云ふことになり、勅宣下つて其の松を伐らしむと云へり。上古高松の生ひたる跡山上にくぼみて猶存せり。土民畠となせり、其の時代更に考えがたし、昔の鳥居跡も今に残れり。

旧観音堂は高松の生ひたりしと云ふ処の少し下にあり。古の堂の石場猶残れり。七間四面程なり、今草堂立てり。

西大坊跡は観音の下少し西の方山の出崎なり。この大坊是亦大いなる寺場なり。其の外大小坊舎の跡幾何といふ数を知らず。高松寺は一山の惣寺号なり。往古此の地真言古規の山にて一山の繁昌亦類ひなかりしと云ふ。今の高松寺観音並に寺の基を鞍掛村に移すといへる年月並に何の子細にて移したりといふ所以を知りたる者なし。綱森、小鴨ケ清水、鞍掛駒板是等の小村に何れも皆由緒ありと覚ゆ。都て云伝もなし。経塚一字一石の経塚といふ。法花経などにや。石の鳥居の事都迄も相知れたる事と見えて去る延宝年中花巻の侍松尾氏大守より京都岡崎御屋敷御番人仰付られ、京都へ登りし時旧き因

あつて常に山科大納言殿へ参候しける。或時亜槐仰せらるゝは其の身が居処の在名を何と云ふぞと御尋なりしかば、花巻と申すと答へけるに、重ねて仰せらるゝは郡の名か里の名かと尋ねらる。里の名と申せば郡をば何と云ふぞと尋ね給ふ。稗貫郡と答へければ稗貫郡ならば高松と云へる里あるべしと仰せらる。松尾氏いかにもこれある由を申上る。そこにて亜槐鳥居は子細あることなりと仰せらる。松尾氏夫れはいか様なる子細にて候やとお尋ね申すことを憚かり終にその所以を承はらずと語る。（以上和稗郷村志）

二、高松に関する伝説として、鉈鉞峠は高松を伐る時使用した鉈と鉞を埋めた所といゝ、綱森も同様使用した綱を埋めた所といつている。又中内村の松崎は高松を切り倒した時高松の梢のとゞいた松の先であり、中内村は切倒した松の幹中頃の一区盗まれたか無いので、中内村の名が出来たと云い、似内は中内で無くなつた松の材木が発見され、似たものであるがそれではないというので、似内の地名となつたと云うことである。

又、高松の大木を伐る時人夫共斧鉞を以て根元を切り付けても、翌日になると夜の中にけずり取つた木片がとび付いて、元の通りの幹に成つていた。次の日も其の次の日も同様で、人夫共全く困つてしまつた。所が側に生いて居た多羅の木が人夫共に教えて云う様、一日の切屑木片残らず焼き棄てると元通りの幹にならないと云つた。人夫共その多羅の木の云う様に毎日焼きすてたところ、幹に木片が付くことなく遂に大木を切り倒すことが出来たということである。然るに松の木の恨みで、多羅の木は其の後大木になることが出来なくなつたと云うことである。

郷村志に石の鳥居の跡今に残るとあるのは、今の志願の窓を云つている様である。旧観音堂の跡と云う処に、今は岩根神社が建てられている。この神社から左の方を少し登ると志願の窓がある。これは礫岩が自然に風雨にさらされて周囲二間四方位、高さ八尺位あり岩の上に笠石を重ねた様に風化し中程に小窓があいている奇岩である。当国三十三番の札所十七番の御詠歌に、思ひきや志願の窓に月ぞすむ昔ねく照す松の葉の露とあるはこれである。

往古の高松寺は其の跡皆坊として言伝えられ七坊あつたと云う、西大坊、東大坊、東禅坊、月向坊、ならい坊、本坊、明ケ沢坊で皆畑地になつている。明ケ沢坊だけは少しはなれた処にあつて、昔頼義、義家が貞任を追撃して此の処に至つた時夜が明けたので明ケ沢の地名が出来たと云い、又この明ケ沢に仙人が長く住んで居たが西根山に飛び移る時、高松の里人に云うには、若し旱魃があつて困る様なことがあつたら、峯に登り西峯山に向つて我れを呼べ、我れ直ぐ飛び来つて必ず雨を降らせてやろうと、故に昔から旱魃の雨乞には村民志願の窓に集つて、濁酒を志願の窓の岩に注ぎかけ、昆布でこすり、一同西根山の方に向つてオーイオーイと高声で呼ぶのである。そうすると一週間以内に雨が降つたと云うことである。又明ケ沢坊のあつた辺に小さい塚が七ツあつて鹿塚といわれ鹿節の獅子頭を埋めた処と云うことであるが古墳ではなかろうか。

次に高松山の七不思議として経塚綱森鉞峠、笊岩、志願の窓、男松女松、小鴨ケ清水の七つの名所がある。一字一石の経塚は峯の男松女松の二本の大木の間にあるが大正初年頃誰かに発掘され、底から出た白磁の瓶がそこに投げ棄てられ埋めた小石も散らばつてあつたそうである。一寸五分位の平つたい小石にお経の文字を一字宛書いて埋めたものである。白磁の瓶高さ八寸、口径二寸、胴径六寸四分、底径二寸五分にも何か尊いものを入れて埋めたものであろう。県史編纂の方にも調べてもらつたがやはり鎌倉初期に支那から来た白磁であろうということである。綱森鉞峠の塚からも底から陶器が発掘された。茶色の花瓶の形したもので肩の辺まで上薬のかゝつたもの（高さ一尺二寸口径六寸底径四寸）と青白色の鉢形のもの（高さ二寸五分口径七寸底五寸）緑黒色の花瓶肩の辺まで上薬がかゝつているもの（高さ七寸口径二寸底径二寸竹筒の先の様なもので横二線をつけた処が四通ある）などで之れらを皆岩根神社に保管している。又笊岩と云うのは岩根神社の側の崖に笊の尻の様な岩が突き出ている。男松は男根に似た瘤があり女松は女の股の如き枝のある松である。小鴨ケ清水は高松山の麓、平屋敷の向うの方で春夏秋冬昼夜しん〳〵と湧き出でいかなる旱魃の年でも減じたことないということである。

往古高松の生いた跡は、志願の窓より峯へ登ると男松女松あり、経塚もあり、尚山の頂上に登ると北方から西方にかけて眺望絶佳である。胡四王山はすぐ眼下である。その頂上の少し下に五、六間四方の窪んだ処は高松の生えた処である。高松の二代松も切られて其の跡に二抱えもある切株がある。今は三代松径三寸位の若い松が植えられている。郷村志に松の跡は畑になつているとあるが山の上で畑になりそうな場所ではない。

三、東禅坊の伝説、北国にて浜人の怖るゝ東禅坊風の根本もこの山より出でたりといふ。其の由来を尋ぬるに昔高松の下に宗元といへる若僧あり。性質愚鈍にて学問なすこと叶はず、日頃肩を並べし同宿の所化も学問進めば程なく能化になる韮多し、然れども宗元はいつも変らず、納所のあたりに詔らひ廻るについても詫びしく、さるを他は学問超越し住名を後世までもとゞめんに、我はいかなれば斯かる鈍根の身をうけ草木と共に朽はてん。たとえ余のことにても名を後代に留めばやとおもひ、観音へ百日参籠し、大力になし給へと祈りし処に、示現を蒙り願望成就す。夫より大力となり初めは力の程をかくし、それとも云はで有りければ、諸人例の宗元と心得、其の性質の愚鈍なるを笑ひたぶり嘲弄すれば、宗元腹を立てわづかにも拳を張れば、即時に打倒され半死半生の目にあへり。それよりして諸人怖れて手差すものなければ、一山にぬさばり恣に振舞ふ。諸人次第に疎みはて立交はる人なし。とかく当山の所住も心にくしとや思ひけん。仙北へ立越けるが何国にても暴悪止まざりしかば、こゝにも住むべき様なく、亦北国へ出で能登国動石山に至りて、東禅坊と云へる無住の僧坊ありしへ入りて主となれり。そこにても暴悪重なりければこゝにもたまり得ず、又さまよひ出て越前の国三国の湊に暫く立留まり居しに、此の浦にても亭荒き振舞ども多くして諸人もてあまし、何とぞして失はんことを密々に相謀る。東禅坊之を夢にも知らず。然るに四月八日其の浦の者共数多誘ひ花見会を催し、東禅坊をも誘ひしかば、何心なく打連れ海岸眺めよき処に大いに酒宴を開き、乱舞になりて興を催しけるが、取分け東禅坊に進めて酒を呑ましむるに元より上戸にて大盃を引うけ数をも知らず飲みしかば、時の移るに従つて次第々々に酩酊し足元もよろ〳〵となりし時、其の座に有りし一人立つて北へ差出でたる岩の鼻に立て沖の船を相望む。下を見れば数百丈のざん岩屏風を立てたるが如し。海上の船

を数へ争ふていにせしかば、東禅坊も人に並んで件の岸に立つていくつや〳〵と云ふ処に、兼て悪みたることとなれば其の隙をうかゞひ大力の者共八人相並んで、後より一同に声を揃へゐいと云て突落す。東禅坊心得たりと後の方へ手をのべ左右の手にて二人かいつかんで、共に海底のもくづとなりしとかや。その亡魂海中の風となつて、必ず四月八日前後には大風起り、商船のわずらひとなれり。さて宗元が沈みし処の海を東禅坊が淵と名く。案ずるに謡の中に東心坊とあり。亦馬場氏の編せられし西国盛衰記にも之をのす。之にも東心坊とあり、海中に突入れしは西国にての様にかけり。然れ共風を忌むは取分け北国にて怖るゝと見ゆ。（和稗郷村志）

東禅坊のことは吾妻昔物語にもくわしく書かれているが、其の中に郷村志にはたい左の様なことがある。『三月廿五日は斯波郡高水寺の鎮守天神の会日なり。年毎に諸人群集しければ、宗元も之を見物せんとてかしこへおもむきけるに、頃しも桜の花咲乱れけるを、皆人あかず眺めありく。宗元人目を計り、そこにありける桜の一かゝへもあるらんと覚しき老木を、やおら捻ぢ折り其の上にねまりて居たり。諸人宗元がわざとは思ひよらざれば、今朝までかくなりし何故にかく折れけるやあやしと云うて、集り見て同じ様に腰かけて休らふもあり。若き輩小童などは、梢の花をたをらんと争ひ上りてどよみけるを、思ふ程人を集めて宗元さらりと尻をはづしければ、其の木元の如く起き直る時其の木に取付ける程の老若、中天に打上げられ、礫の如く飛びければ、花よりさきに落花となる云々』とある。

岩根神社、白山神社及び観音堂

一、岩根神社　旧高松観音堂があつた所にあり、祭神大日女神を祭つている。本殿二間半四面、舞殿は二間に三間、境内坪数二百四十六坪

二、白山神社　祭神白山姫命、社殿三間四面、舞殿二間に三間、境内坪数三百五十三坪

三、観音堂　近年新たに志願の窓の下方に小さく建てられた。

鞍掛の高松寺、観音堂及び白山神社

一、鞍掛高松寺、山号鷹尾山この寺元は高松村に有りしといふ。前にも云ふ如く何の子細にていつの時代当処へ引移したりといふ所以を知らず。昔は真言古規の寺なりしに八幡寺開創以後その下に相属す。去る寛文年中大守の求めによりて十六羅漢の画像を捧げしその賞として寺領十石寄附せらる。（祐良曰く瑞興寺々領御証文と同年同月同日の由、瑞興寺俊道和尚の咄なり）（和稗郷村志）この郷村志の外にも花巻古事記に南部利直公の時、鍋倉にあつた万福寺を花巻に移し慶長年中八幡寺と改称、軍事要害地なるを以て両郡鎮守として軍神愛宕を勧請せられた。その八幡寺開創以後、高松寺がその下に属したとある。

鞍掛に高松寺が移つたことについては、昔矢沢の火の口から火事起り胡四王山を始め高松山まで延焼大山火事となり、胡四王堂のみを残し諸寺諸坊烏有に帰した。其の後高松寺の霊場も全く荒廃して居たが、特志家であり檀家であり大富豪であつた者が鞍掛にあつたから、地所や堂閣や金品等を寄進して、高松寺の再興が見事に出来上つたのである。口碑に残つている鞍掛山立岩が崩れても柳田の家はゆるがないと云われた大富豪柳田家であつたかも知れない。其の再興された年代は天保六年に書いた二郡見聞私記に高松寺境内の樹齢から見ると、三四百年前に再興されたものといつているから、足利四代義教の永亨年間西暦一四三五年頃と見ているのである。尚元の高松寺は南北朝時代に足利高氏から寺領四百石を貰つた黒印を見たと云うことを花巻古事記に書いてあつた。高氏は奥州の勤王軍を圧迫しようとして、色々恩賞を堵して勢力を計つたから、斯波氏稗貫氏は其の傘下に馳せ参じた。高松寺は古い霊場として戦勝祈願所の点から申立て、寺領の増加が行われたかも知れない。

鞍掛高松寺は藩政末期まで栄えたが、明治維新となり廃寺となつた。高松寺にあつた弘法大師、興教大師の木像は、現在矢沢の大畑に買受けられ拝まれている。坐像で丈一尺位のものである。前机は之も矢沢痘瘡神社にある。

二、鞍掛観音堂、高松寺と同時に旧高松の観音堂が再建されたのである。享保七年に書かれた花巻古事記に高松女御の所持金仏十一面観音を安置したとあるが高松にあつた時の最初の本尊であろうか。高松女御が宮中に召されて松の木の事も天聴に達して石の鳥居を建てられ、又女御の病気は松の精霊の祟りと占われて、勅命で松の木が伐られたとも伝えられ、又高松女御は鞍掛の出生であつたので旧高松寺も旧観音堂もこの地に再興されたのであると九十翁渡部直吉氏が語つていた。

現在の観音堂は昭和二十三年改築され、一間半四面である。本尊十一面観音は座像で蓮台共三尺八寸五分あり、年代は徳川時代のものと思われる。享保頃の御堂は三間四面とあり、元文四年三月再建の棟札にも、三間四面で別当は法印光玄とある。光玄の位牌も残つている。表に梵字阿字の下に法印権大僧都光玄不生位と書いて、裏には延享元子四月十九日高松寺奉了房とある。この光玄法印より石碑もあり只一つ位牌も残つている。この人の師匠か宥尊と云う人の碑も見える。観音堂にある六枚の棟札によつて見ると宝永五年（一七〇八）には宥栄元文四年（一七三九）には光玄寛政元年及び同十一年（一七九九）には宥大周文化九年（一八一二）には宥厳嘉永二年（二五〇九）まで宥密、其の次は宥密の弟子堯伝、其の次は堯伝の弟子で明治に至り高松寺廃寺となり復飾して神官となり高松定登と云い、白山神社の祭主となつた。

高松寺の跡は畑地となり山門の跡には高松寺由緒の記念碑が建てられた。其の寺の前にも高松寺の寺地と云われて畑になつてる処があり眺望のよい処である。その畑地の下の方は田をへだて〻向うに丸い山が見える。それは経が森といつて二郡見聞私記にある経が森である。

三、経ヶ森『観音堂並に寺を今の鞍掛に移すこと年歴知れず。寺内の諸木を見るに、三、四百年以前と見えたり。又鞍掛の坂の上より東を見るに真丸なる山あり。之を経ヶ森と云ふ。昔旧高松寺の繁昌の節、この山の頂に法花経一石一字書写して納めし処なり。依て経ヶ森と云ふとあり。この山の続き西北の山下に、矢沢村立石の金右衛門と云ふ者の別家に、助四郎と云ふ者ありしが、手跡算術も相応にて用ひられし男なり。寛延初年（一七四八）の頃とや、大雪の夜出家一人来り宿

を乞ひけり。易き御事とて様々もてなしければ、終夜有がたき事を説知らせければ、其の夜明かしけり。翌朝飯後茶を呑み雪もはれければ、暇乞して立けるに、門前へは出ずして、山の平に行きければ、助四郎申すには、さ様お出候へば経ヶ森へ登るなり。一向前へは道なき処なり。門前へお出、大道をお越しあれと申しければ、大道へ出で候も雪をふむ、戻るまじとて行きけり。助四郎詮方なく出家の行衛を見届けるに、何やら光物眼へ障ると覚へ、眼をふるまゝに出家は見えず。足跡を見るに、山の平半途迄、上へも脇へも足跡なしとぞ』（二郡見聞私記）

四、白山神社、明治初年まであつた高松寺も観音堂も廃仏毀釈の時廃されて仏像は矢沢の宝昌寺に運び観音堂をば高松寺の鎮守白山神社とした。明治三年の棟札がある。それに天朝御役大参事東次郎、野田玉造、大属赤前兵一、江刺和多利、小属五日市直見、沢田勘五郎、祭主藤原定登、祝詞師藤原道徳とあり、この藤原定登は高松定登で藤原道徳は胡四王社の杉山道徳である。現在の神社は大正十三甲子年九月三日に再建されたもので其の棟札には祭主佐々木遠里伊都、世話人小原廉造小原久八とある。

五、高松寺宥密法印は寛政七年矢沢小鞍掛に生れ高松寺宥密法印の弟子となり勤勉修業功を奏し後師の後を継いで高松寺住職となつた。五十一才の時阿闍梨の位を受け、五十五才嘉永二年四月十四日和賀稗貫の真言宗の総領花巻八幡寺の住職となつた。後岳の妙泉寺に転住し明治四年九月一日七十七才で生家小倉掛に於て歿した。宥密師の使用した袈裟衣及び乗籠文書等が小倉掛中島家に保存されている。

宥密の弟子堯伝も高松寺の住職となり後八幡寺の住職に転じたが、優秀な学才をそねまれて毒殺されたということである。

東宮殿下行啓記念碑、裳掛松、連理松、駒立森

一、行啓記念碑、安野橋から約十一町東方土沢街道左側松林の中にあつて碑の前には飲料に適した清水が湧いている。

（後略）